
この子誰の子!?ハヤテのごとく!

深紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この子誰の子！？ハヤテのごとく！

【Nコード】

N0795I

【作者名】

深紅

【あらすじ】

ある日、ハヤテが連れてきた2人の子供はハヤテとヒナギクの子供だった！？「ハヤテのごとく！」のハヤヒナ小説。

1章 知りたくない事ほど知ってしまう世の中

「……………」

「……………ハヤテ」

「……………何でしょうか、お嬢様」

ナギはハヤテの足にしがみついている子供（2人）を指差した。

「何なのだ、その物体は」

「……………公園で拾っちゃいました……………」

「ふうむ……………ハヤテの話は長かったので簡単にまとめると」

・ハヤテは今日は休日だと言うのに朝4時に起きてしまった

・この時間だとナギも寝ているだろうし、公園へ散歩に出かける事にした

・するとこの2人が公園でうずくまっていて、迷子だと思ったハヤテは屋敷に連れて来た

・そしたら2人は口をそろえて「お父さん」と言い出した

・2人は兄妹のようで、7歳ぐらいの兄は「風斗^{かざと}」、4歳ぐらいの妹は「桃奈^{もちな}」というらしい

「あまり簡単にまとまっていますね」

「細かいことは気にするな。それより……………」

ナギはちらつと2人を見つめた。

桃奈がびくつ、と体を振るわせる。

「なんとなくだが……………こっちの風斗って奴はハヤテに似ているな・

……………桃奈はヒナギクか？」

「そういえば、そうですね」

「何がよ？」

後ろで、聞き慣れた声が聞こえる。

ナギが慌てて振り向くと、そこには仁王立ちしたヒナギクが立っていた。

「え！？なんでヒナギクがここに？」

「あ、それはでs」お母さー……………ん！」

！？

ハヤテ、ヒナギク、ナギは固まった。

特に状況を掴めていないヒナギクは目を丸くし、駆け寄る子供を抱きとめていた。

「ど……………」

ナギはゆっくりと口を動かし、最後に思いつきり叫んだ。

「.....」
「.....」

1章「知りたくない事ほど知ってしまう世の中」(後書き)

子供達のプロフィール

(兄7歳) 綾崎 風斗

5月16日生まれ。牡牛座のA型。

性格はヒナギク似。妹思いで優しいが、
照れ屋で口が悪い。

容姿はハヤテ似で空色の髪が特徴。

顔はヒナギク似。

(妹4歳) 綾崎 桃奈

10月3日生まれ。天秤座のA型。

性格はハヤテ似で泣き虫なおっとりや。お兄ちゃんラブ。
容姿はヒナギク似で桃色の髪が特徴。

顔はハヤテ似。

2章 漫画上の夫婦喧嘩ってなんで皿を投げるんだろっね？

10分後。

やっとナギが落ち着いてきた頃。

重苦しい空気を破るように、ナギが口を開いた。

「……………どういことだ」

「えつとですね、こういったトラブルはヒナギクさんのほうが詳しいかと思ひまして……僕がお呼びしたのですよ」

笑顔で答えるハヤテに、ナギは頭の中で何かが切れた。

「ちつが……う……何故こいつらはハヤテを父親と呼び、ヒナギクを母親と呼ぶのだ！」

ナギの目がヒナギクへと向けられる。

「わ、私は何も知らないわよ！第一、私はまだハヤテ君と……」
もごもごと、言葉を詰まらせるヒナギクを見て、風斗はナギの足を蹴り飛ばした。

「な、何をするのだ……！」

「母さんをいじめるな！この成金チビババア……！」

あ。死亡フラグ。

「……………貴様」

さすがにハヤテも危険を察知した。

「ちよ、ちよつとこの子達と買い物に行ってきますー！ほら、ヒナギクさんも！」

「えっ！きゃあっ！」

ハヤテは子供達と、ヒナギクを脇に抱えると猛ダツシユで屋敷を飛び出た。

まさに疾風の如く。

「こらー！ー！まだ話は終わつたらんぞー！ー！」

「ったく、何なんだよあのチビニー ツインタール」

「お兄ちゃん・・・あの怖かったよう」

ぐずぐずと、桃奈が鼻をすする。

「ま、まああの子も悪い子じゃないんだし。そんな事言っちゃ駄目よ？か・・・風斗

桃奈も泣かないのっ！何か食べる？」

ヒナギクが2人の子供をなだめている姿を見て、ハヤテはこう言った。

「なんだか、本当のお母さんみたいですな」

「えっ」

ヒナギクの顔が赤くなる。

「べ、別にっ。子供好きだし！」

「女の子らしい所もあるんだなあって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それって私が女らしくないって事？」

「って・・・このオーラは！！」

怒りを放つ主婦などが持つ独特の殺気！

やばい！本日2度目の死亡フラグ！！！！

「お母さん」

桃奈が殺気立つヒナギクのスカートの裾を引っ張る。

「……何、桃奈？」

「私、あれ食べたい」

小さな、ふつくらとした指が指すのはサーティン　ンアイス　リー
ム。

秋限定のかぼちゃアイスや、おいもアイスなどの看板が立てかけられて
いる。

「あ、僕も。お母さん、いいかな？」

「……いいわよ。お父さんの奢りなら」

勝ち誇ったかのような笑みでハヤテを横目で見るとヒナギクに、ハヤ
テは逆らえなかった。

「あはは……お金、あつたっけ？」

ハヤテの明日はあるのか！！続く　かも！

「かもってなんですかー……」

「うん！いいッッコミよー！」

「……愛沢さんですか」

2章「漫画上の夫婦喧嘩ってなんで皿を投げるんだろっね？」（後書き）

とにかく子供が書きたい！！

それだけですっ！

3章 一石二鳥の言葉を信じたら何も帰ってこなかった

「おいつしー！！」

風斗、桃奈はアイスを頬張る。

何故買えたのか。

もちろん、ハヤテはお金がなかった。

「本当に、ありがとう。鷺ノ宮さん」

たまたま通りかかった鷺ノ宮伊澄に助けられただけだった。

「いえ・・・わたしも迷っていたのですけれど・・・たどりやすい気配があったので」

最後だけ、ハヤテにしか聞こえないように言った。

「たどりやすいつて・・・やはりあの子達のことなのでしょうが」

ヒナギクたちから距離を置き、ハヤテは伊澄に言った。

「はい。あの2人は妙な気配がするのです・・・」

「妙な？」

「ハヤテさまと・・・生徒会長さんの気配が混ざり合ったような・・・

・そして、今の時代の

子ではないようです」

「すると、やっぱり未来の僕達の子供ですか？」

伊澄が頷くのと同時に、ハヤテは（やっと）気付いた。

『って事は……やっぱり僕はヒナギクさんと付け、結婚するの
かつ!?!』

待て待て待て待て。

いや、そんな事があるわけじゃないじゃないか。

第一僕は嫌われてるし、それに……。

「お父さん!」

顔を真っ赤にし、よろめくハヤテは我に返った。

「な、何でしょう」

「はい、あーん」

ぱくり。

思わず、口を閉じた。

冷たくて、甘い苺の香りが口いっぱい広がる。

下には桃奈の笑顔。

「お兄ちゃんがお母さんにあーんさせてたの。だから私もお父さん
にやるの」

ヒナギクさんも、風斗に少しもらって口をほころばせている。

「ありがとう、桃奈」

「どーいたしましたして!そうだ!お母さんにもあーんさせてくるねっ」

小さな背中がヒナギクさんに駆け寄ると、伊澄が微笑む。

「可愛いお子さんですこと……ハヤテさまと生徒会長様にそっく
り」

ハヤテはえへへ、と笑い、また顔を赤くした。

「そ、それより、あの子達はどうすればいいのでしょうか？その・
・将来の僕等が心配しているのでは？」

「そうですね・・・あの子達が何年後から来たのかがわかればいい
のですけれど」

「うーん・・・難しいですねえ」

「あ、早くしないとナギが怒っちゃいます・・・何か分かったら連
絡しますね・・・」

「じゃあ、お金は次に返させていただきます！ありがとうございますま
したー！」

静々と去っていく伊澄を見送った後、ヒナギクは呟いた。

「あら？ナギの家はこっちじゃなかった？」

えー、やっぱりそんなオチ？

3章 一石二鳥の言葉を信じたら何も帰ってこなかった(後書き)

何か改装したみたいですね・・・
使いづらくて何がなんだか(グルグル)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795i/>

この子誰の子!?ハヤテのごとく!

2010年10月11日02時51分発行